
儚い夢

雪那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

儚い夢

【Zコード】

N8167B

【作者名】

雪那

【あらすじ】

亮一は学校ですごくモテるが、ある理由で断っていた。それは、
幼馴染の優の存在だった。優と亮一は付き合っていたのだ。しかし、
亮一は優が本気ではないと、友達に打ち明けてしまった。優はもち
ろん本気であったのに、亮一は信じていなかった。それを聞いた優
は自分の誕生日にもう一回告白する事に決めたが・・・亮一はその
場に現れなかつた・・・何故か

(前書き)

言葉が疎かですが。
読んでいただけたと嬉しいです！

もう少し…時間を下せー。
もう少しでいいから…

校舎裏

「あの…ずっと杉浦君の事好きでした。付き合って下せー。」

女の子の告白。

「めん。無理」

そしてふる俺。

杉浦亮一。高2

いつもながら無残なフリ方。
もうあきあきだ。

「亮ちゃん!」

「あ?」

「またフツたの?優しくつれないの?」

「つむせーな優。」

須田優。高1

俺の幼馴染み。

いつも校舎裏に来る変な奴。

「また来たのか?つか俺がOKしたらお前キレるだろ」

「まあね。亮ちゃんに限ってそれは無いと思うけど…」

そして俺の彼女(?)

お遊び程度の付き合いみたいなもんだが…

「あつ!1限体育だ!」

「じゃあ早く行けよ。」

「うん、ばいばい!」

嵐のよくな奴だ…

「はあ

「亮一！みーちゃつた」「

「…今田…」

「何？お前つてロリコン？あれ一年だろ？」

「違う。只優のお遊びに付き合つてるだけだ」「

「へえ大変だな」

俺は優の事を考えて無かつた。

優がもういないと思つて。

後から考えると結構ひどい…

翌日から優が校舎裏に来なくなつた。

俺は毎日、同じ事を繰り返し言つているのに…

帰り道電話してみることにした。

「もしもし」

『もしもし』

「優。もう校舎裏来ないの？」

『もういい。亮ちゃんの馬鹿。』

ブーブーブー

(何だ？)

俺は何がなんだか分からなかつた。

「ただいま。」

「おかえり！病院どうだつた？」

お玉を片手に持つた母さんが台所から顔をだす。

「あつ！」

「早く行きなさい……馬鹿息子……！」

「うお……」

思いつきり蹴り飛ばされた。

もう病院なんて面倒だ。

「イテテ…」

早く行つてしまおう。

明るければ気持ちがいい商店街も、人がいなかつた。とにかく寒い。

「雪でも降りそう…」

市立病院心臓外科

「お、来たね。今日は来ないかと思つたよ。」「すみません。」

ドクターが待つていてくれた。

渋々診察室にはいる。

「じゃいつもの様に」

「はい。」

診察を終えるとドクターの表情が変わった。

そしてすぐに笑うと

「これからまだまだ寒くなるから、スポーツは控えてね。」「はあ…はい」

俺は心臓病だ。

だから大好きなスポーツはあんまり出来ない。
まつ他な事は何でも出来る！

とこうポジティブに考えてるけど。

病院を出ると雪が降つていた。

「うわ…寒っ」

家迄徒步20分

ぼーっと歩けばあつという間の距離だ。

俺は優にもらつたCDを聞きながら歩いた。

「…優」

家の前に着くと優が立つていた。

つかつかと歩いて優は近付いて來た。

ドン！

「杉浦亮一！」

私！本気だから！」

優は手紙を押しつけて帰つてしまつた。

「…………？」

亮ちゃんへ

この間の話聞いたやつだ。

私は遊びのつもりなかつた。

でも亮ちゃんは嫌だつたんだよね。

私は杉浦亮一が大好きです。

す。
付き合ってくれるなら1／31志賀駅北口桜公園13時に待つま

優

一月三十一日つて優の誕生日

といひよいか困った。

卷之三

亮ちゃんのことだから。

でも来てくれないで思って公園に向かうせやんた

卷之三

「もしもし」

優！亮ちゃんか！

何事も無く来てくれると思ったのに。

優を傷つけたのは俺だ。

俺は優を好みたしは見てた

俺は今二行かなれやーなはーんだ。

シナリオ

亮一！

「お母さん……」

「優…大丈夫。手術終わったから。でもね…」

「…嘘つ」

昔、お母さん同士の会話を聞いた事がある。
すつゝい気になつて頭に残つている。

「亮一君、この頃どう?」

「相変わらずよ。元氣で大変。」のまま何もなかつた様に生かせて
あげたい。」

「信じられないわ。亮一君が心臓病だなんて。」

「私、亮一が病氣でも後悔なんてして無い。あと20年の命なら。
楽しい20年になつて欲しいと思つてるの。」

「そうね！亮一君なら大丈夫よ！あなたの息子だもの」
最初何だか分からなかつたけど。

亮ちゃんは20年しか生きられないんだ。

「お母さん！大丈夫だよね？亮ちゃんちゃんと田覚えますよね？」

「優！何動搖してるの！貴女が亮ちゃんを信じてあげなくちゃいけ
ないんでしょ！」

「…うん…」

亮ちゃん田を覚まして。

辛いよね…

酸素ボンベ取りたいよね。

ごめんね。手を握るしか出来なくて…

亮ちゃんは昔から入院が多かつた。

その度に胸に傷が増えて泣いていた。

痛いとは決して言わないけど。

ずっと苦しくて泣いていたんだと思う。

私の知らない所で、孤独と病氣に一人で立ち向かつてたんだ。

「亮ちゃん…」

暗い…もう先が見えないみたいだ。

でも何だか温かい…。

俺は今どこにいるんだろ？

真つ暗な所でがむしゃらに光を探している。

【1→3→志賀駅北口桜公園13時に待つてます。】

そうだ優はどこにいるんだ…

優に会わなくちゃ。

優：優。優！優！

「す…ぐる」

亮ちゃんが田を覚ました。

私の名前を呼んでる。

亮ちゃんが帰ってきた。

「亮ちゃん…おまよひー。」

「公園…」

「良この…亮ちゃん来てくればよかったですんでしょ？あいつがヒーラー…」

「…」

もつ…念こに来ちゃいけないって思った。

亮ちゃんは今回の入院で限界らしく…

私が側にいると亮ちゃんは頑張つて生きよつとじてしまつから…

もう無理しないで、亮ちゃん…

「すぐ…る。泣く…な。」

「亮ちゃん…」めんなさい。もつ、念えなこよ。

亮ちゃんに私何も出来ないもん。『めんね…亮ちゃん…大好きだつたよ…』

「すぐる…？」

神様は不公平だ…

なんて、何回も思つ。

変わつて欲しいつ。

でも、運命は変えられない。

だから、もう少し時間を下す。

せめて、大好きな子にお礼が言えるだけでも…
もう少しで良いから、あの子の笑顔を見せて下さい…
それだけで良いんです。

「今日は帰るね」

私はセカセカと帰る支度をすると病室を出た。
私はここにいちゃいけない。

迷惑を掛けてしまつから、私は亮ちゃんの側にいられないんだ。
止めどなく涙が流れる。

私は逃げたんだ。

「亮君気分はどうだい？」

「…ん」

俺は今首を動かして、返事をする体力しかない。
きつとすぐ元気になれるだらう。

「亮君、今回の入院はきっと長くなるから頑張りつな
「な…んで…」

「7回も手術しているからゆっくり経過が見たいだけだよ。」

「…」

嘘だつてすぐに分つた。

主治医は嘘の時に笑う。
俺はきつとこの入院で…

前はそんなことなかつたのに。

「それじゃーまた来るから」

無理やり笑う主治医が悲しく見えた。

「亮」

母さんが来た。

笑っているのは何故？

「亮？俯いていたら心臓似悪いわよ？」

「…俺…」

「な…に？」

「おじいさんになれる？」

おじいさんになれる？

遠回りに「生きられる？」と聞いている。

どうしても口では言えない一言。

母さんは息をのんだ。

「亮？何言つてるの？母さん亮が元気になつてくれるの信じてるよ

？」

「もう9年…もたない」

天井を向いて流れない涙をみながらあさんにいつた

「…亮？9年とかカウントダウンしないで？20年これから生きていやるつて言つてよ」

「お母さん…ほんと…言つてよ」

「大丈夫、大丈夫だから…頑張ろつ？ね？」

「……」

もつ聞くのはやめよう。
嘘は聞きたくないから。

ガラッ

「亮ちゃん！」

「優。学校どうしたんだ？」

「さぼっちゃった！」

「オイ！」

亮ちゃんが目を覚ましてからもつ3日がたつた。

食事は取れないもののしつかりとした言葉で返事してくれる様になつた。

ここに来るのは今日で最後。

亮ちゃんを見てると苦しそうだから。

この前亮ちゃんの主治医に聞いたんだ。

「亮君は気持ちが強いんだけどね。体が悲鳴を上げているんだ。今度話すつもりだよ。僕は頑張つて助ける方法を考えたいよ。」

「先生が言えば亮ちゃん頑張ると思います。でも私が側にいたら、

亮ちゃん辛くなっちゃうから。私何もできなくて…」

最後は自己嫌悪に陥っちゃって…私馬鹿みたいだ。

「優?」

「あ…何?」

「だから俺が退院したら、スケート行こうつー…」

「…うん!」

もう会えないなんてやつぱり言えないし、会いたくなつちやうかも
しない。

無邪気な亮ちゃんを見ると、目が離せないんだ。
ガラツ

「亮君お話が」

「あつ先生。じゃ優外で待つてー!」

「…うん」

亮ちゃん。『じめん。さよなら』。

最後まで、私は何もする事ができない。

怖いんだ。

目の前にいる最愛の人気がいなくなることが。

「え?」

一瞬耳を疑つた。

主治医から出た言葉。

それは『余命3年』だった。

俺、17だけど何となく分かってた。
でも嫌だ。

まだ、何もして無い。

「先生…俺まだ17で高2だよ?二十歳で死ぬの?」

「…」

主治医は何も言えなかつた。

きつと言いたくなかったんだろ?。

でも、隠したら俺が怒るから。

「もう少し…生きたいな…俺…」

力の入らない右手を握ると涙が止まらなかつた。

主治医が出たあと、入ってきたのは優じやなくて看護師だつた。

「亮君。優ちゃんお手紙置いてつたわよ~」

「優が?」

俺は封筒を預かるとすぐに開けた。

「亮ちゃんへ

亮ちゃん今迄私のわがままに付き合つてくれてありがとう。
無理してたよね…。ごめんね。

もう、亮ちゃんに会いに来ないから。
亮ちゃん私がいると、無理してるから。
元気になつたら、スケート行こうね。
行きたいな…

でも、もう会えないよ。

私亮ちゃんみたいに強くないから。
怖いんだ…

亮ちゃんが、私の側じゃいられないんだ。
今迄ありがとつ。

亮ちゃん大好きでした。
さよなら」

無理してる?俺が?

段々怒りが頭に昇つて來た。

「これいつ渡された?」

「5分位前よ?」

ガシャン!

「亮君!-----!」

俺は手に付いていた点滴をひきちぎると、走つた。

優はまだ病院にいる!

院内放送で呼ばれても俺は走つた。

息が苦しい。でも…

優一！

優は玄関を出た所にいた。

「亮る」

「馬鹿野郎！」俺才

「馬鹿野郎！俺はお前の前で無理なんかして無いし！迷惑でもない！俺はお前が可愛くて仕方ないんだ！！優！最後なんて言うな！大

好きだ！」

亮ちゃん

危なし！！！

トニイ

優一

俺は気を失つた。

目の前で優が飛ばされたのを見た後、

優・優・すぐる

「ガーゼ!! 輸血すぐ運んで!! O型の+よ! 早く!」

須田さん？聞こえますかあ？」

意識レベルが下がっています！」

「撮つてすぐ」

久留米

卷之三

看護師の話によると、ワゴン車に突っ込まれた。

俺は自分を責めた。

俺が優を呼ばなければあんな事には…

「呼吸停止！」

「呼吸器入れて！須田さん！しつかりしてえ！」

先生！心肺：停止……

そんな

「すぐる――――――――――」

1年後。

俺は体力がほとんど無くなり喋るのもままならなくなつた。優は俺が起こしてしまつた事故で俺より早く逝つてしまつた。優は、俺の大好きの一言で運命が変わつてしまつたんだ。

でも、あのセリフの後優は笑つた。

あいつの笑顔は久しぶりだつた。

優の母さんは俺を恨んだりしなかつたのは、きっと優が最後に笑つたからだと思う。

俺は、やっぱり優が大好きだつたんだ。

ありがとう…

ガラフ

「りょーう?」

「……」

静かな病室に心肺停止音だけが響いていた。

「亮――――――――!」

神様は時間をくれた。

俺に、優に…。

俺は大きな翼で、最愛の人の所へ向かつた…。

E
N
D

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8167b/>

偽い夢

2010年12月9日18時06分発行